12.　資源管理指針等推進事業（公募型研究）

担当者　　調査研究部　　**本間　隆之**

（１）目　的

スケトウダラは，平成23年３月に公表された我が国の海洋生物資源の資源管理指針（平成24年12月改正）の対象魚種となっている。本事業では，スケトウダラ日本海北部系群を漁獲対象としている沖合底びき網漁業（以後，沖底）の資源管理指針・計画について，その効果や問題点を検証するとともに，沖底の主要な漁獲対象種であるホッケ，マダラおよびソウハチについても管理措置の必要性について検討することを目的としている。

（２）経過の概要

北海道区水産研究所と道総研（中央水産試験場，稚内水産試験場，函館水産試験場）が事業を担当した。北海道区水産研究所は，スケトウダラ資源と沖合底びき網漁業に関わる現状および事業全体の取りまとめを担当し，道総研中央水産試験場，稚内水産試験場，函館水産試験場は，ホッケ，マダラ，ソウハチ資源と知事許可漁業に関わる現状の取りまとめを担当した。

（３）得られた結果

ア　沖合底びき網漁業の魚種別漁獲状況

日本海の沖底における主漁獲対象種の2000年以降の漁獲量を以下に示す。

スケトウダラの漁獲量は，2002年の3.8万トンをピークに減少し，2011年は2002年の1/6に減少した。漁獲量の減少は資源状況の悪化の影響の他，2008年度よりTAC数量が大きく削減された影響も大きい。

ホッケの漁獲量は2008年までは８万トン前後で比較的安定して推移していたが，2009年以降は減少傾向となり，2011年は2000年の1/3に減少した。

マダラの漁獲量は2000～2004年までは２千トン前後で推移していたが，2005年に１千トンまで減少し，それ以降は１千トン前後で推移している。

ソウハチの漁獲量は2007年までは1.0～1.3千トンの範囲で推移していたが，2008年以降は0.8～1.0千トンの漁獲で推移している。

イ　沖合底びき網漁業の主漁獲対象種の資源状態

日本海北部系群のスケトウダラの資源量は1987～1992年度には高い水準にあったが，1991年度以降は減少傾向を示しており，2007年度にはピーク時の1/10程度に減少し，2011年度も依然として低水準にある。

道北系群のホッケの資源水準は，2008年以降減少傾向が続いており，2011年は低水準にある。

日本海海域のマダラの資源水準は，2005年以降は低水準で推移していたが，2011年には中水準となった。

日本海～オホーツク海海域のソウハチの資源水準は，中水準のまま推移しており，2011年も中水準である。

ウ　資源管理の状況と資源維持・回復のために必要な取り組みの提案

スケトウダラはTACにより管理されている。TACはABCに基づき漁業者の経営状況等も考慮され設定されている。またTACは国が定めた中期的管理方針に合致するように設定されており，スケトウダラ日本海北部系群では「資源の減少に歯止めをかけることを目指して管理を行うものとし，資源管理計画に基づく取組の推進を図るものとする」とされている。ホッケ，マダラ，ソウハチについては，TACによる管理は実施されていない。

北海道区水産研究所が行ったシミュレーションの結果によるとスケトウダラ日本海北部系群を資源回復させるためには，豊度の高い年級群の発生により今後良好な加入があったとしても，若齢魚の保護だけではなく，TAC数量自体を増加させないことが必要である。

国の資源評価および北海道の資源評価の結果，マダラおよびソウハチについては概ね現状よりも資源を減少させないことを目標に，現状以上の漁獲圧をかけない操業が望ましいと判断される。しかし，ホッケについては資源の急激な減少が認められることから，資源回復に向けた取り組みを実施する必要がある。

（４）成果の活用策

取りまとめ結果は平成25年３月１日に札幌市で開催された資源管理指針等推進事業報告会にて報告をした。また，これらの結果は，年度末に報告書としてまとめられた。

なお，本事業は今年度で終了となった。